

高校生の電子メールに対する意識と共感経験との関連性

A Relationship between Consciousness of E-mail usage and Empathic Experience in Senior High School Students

森山 潤* 川上 達大** 中原 久志*** 上之園哲也**** 萩嶺 直孝*****

MORIYAMA Jun KAWAKAMI Tatsuhiko NAKAHARA Hisashi UENOSONO Tetsuya HAGIMINE Naotaka

本研究の目的は、高校生の携帯電話を用いた電子メールに対する意識と対人コミュニケーション時の共感経験との関連性を把握することである。高校生728名に対して調査を実施し、主に携帯電話を用いて電子メールを使用していると回答した658名を対象とし、分析を行った。その結果、コミュニケーション時の共感経験は、電子メールに対する重要性認識やトラブル経験の有無等に直接関連していなかった。しかし、電子メールに対する意識では、感情共有の経験を持つ「両向型」や「共有型」の生徒の方が、共有経験を持たない「不全型」や「両貧型」の生徒に比べて、電子メールの利点や欠点の認識、マナーに配慮する意識が高い傾向がそれぞれ示唆された。また、この関連性には性別間の差異が認められ、男子はマナー意識に対してのみ、女子では利点認識とマナー意識に対して共感経験の影響が示された。このことから、女子では他者との感情共有を基礎としたメディアコミュニケーションの経験が、メディアそのものの特徴の理解へと結びつきやすいことが示唆された。

キーワード：高校生、電子メール、意識、共感経験、高校情報科

Key words: High school students, E-mail, Consciousness, Empathic Experience, Information Study

1. はじめに

本研究の目的は、高校生の携帯電話を用いた電子メールに対する意識と対人コミュニケーション時の共感経験との関連性を把握することである。

高校生のインターネット使用に関して情報モラルの問題が指摘されて久しい。携帯電話やスマートフォン等の機能の一つである電子メールは、高校生の主要なコミュニケーションツールとなっている一方、インターネット使用による被害やトラブル、ネットいじめなどの問題が危惧されている。このような情報化社会の影の部分への対応として、高校生の情報モラルの向上を図ることは情報科教育において重要な課題である。しかしながら、その実践は教育現場にとって必ずしも容易ではない。その背景として、情報モラルが生徒の内面にある感情や意識、価値観や経験と密接に関連していることが挙げられる。

例えば、高校生の電子メール使用に対する意識については、大貫ら(2007)が高校生の電子メール利用時に重要視される社会的スキルについて調査を行い、日常生活における社会的スキルが高い生徒は気持ちの配慮により気をつけていることを指摘している¹⁾。さらに、木内ら(2008)は、携帯電話によるコミュニケーション過程の分析を行い、通話やメールの使用が対人関係の親密性に影響を及ぼすと指摘している²⁾。また、宮川ら(2011)は、情報モラルに対する意識と道徳的規範意識との関連性を詳細に分析し、「節度」や「正義・規範」などの意

識に基づいて情報モラル指導を展開することが重要であると指摘している³⁾。

この問題について筆者らは、高校生を対象に、電子メールに対する利点や欠点の認識、コミュニケーションにおける配慮事項等を探索的に把握することを試みた(森山ら2011, 以下、既報とする)⁴⁾。高校生計541名を対象とした自由記述調査を実施し、得られたコメントをテキストマイニングによって分析した。その結果、利点認識では「電子メールの用途」、「コミュニケーションの対象」、「電子メールの特徴」の3主題が、欠点認識では「悪質なメールによる被害やトラブル」、「メール使用時の制約と限界」、「時間の浪費」などの8主題が、マナー意識では「チェーンメールへの適切な対処」、「わかりやすい文章の工夫」などの5主題がそれぞれ抽出された。

また同様に、前報で抽出した計16主題に基づいて、高校生が携帯電話などの携帯情報端末を用いて使用する電子メールに対する利点認識、欠点認識、マナー意識の関連性を把握しうる測定尺度を構成し、利点・欠点認識がマナー意識の形成にどのような影響を及ぼしているかについて検討した(森山ら2011, 以下、前報とする)⁵⁾。その結果、全体では利点・欠点認識の両者が共にマナー意識の形成に因果していた。しかし、使用頻度の違いやトラブル経験の有無等によって、マナー意識への影響力に差異が認められた。特に、使用頻度の少ない生徒では利点認識の影響力が消失する一方で、使用頻度とトラブ

*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻授業実践リーダーコース ** (株)日本電産トーソク株式会社

兵庫教育大学附属中学校 *西宮市立山口中学校 *****熊本大学教育学部附属中学校

平成23年10月21日受理

ル経験が共に多いヘビーユーザの生徒においては、逆に利点認識の影響力が強まる傾向がそれぞれ示された。

既報及び前報の結果から、電子メールに対する意識の形成には、電子メールに対する重要性認識やコミュニケーションにおける配慮事項が重要な役割を果たしていることが明らかになった。しかし、電子メール使用時のマナー意識を適切に向上させる具体的な情報モラル指導のためには、生徒の実態の背後にある心理的・内面的な要因の影響についてさらに詳細に検討する必要性が課題として浮上した。そこで本研究では、このような心理的・内面的な要因のひとつとして、「コミュニケーション対象との関係性」という視点から、生活の中の様々な対人コミュニケーション場面で他者と感情を共有する経験、すなわち共感経験との関連性に着目することにした。

共感経験とは、角田（1991）によると「能動的または想像的に他者の立場に自分を置くことで、自分とは異なる存在である他者の感情を体験すること」である。共感経験の違いは、他者理解を前提とした感情や認知を統合したものであり、他者とのコミュニケーションの取り方にも影響を及ぼす要因となるものと考えられている⁶⁾。角田（1994）はまた、他者理解に通じる共感が成立するためには、他者との感情を分かち共有機能と、自他の個性の認識がなされる分離機能が統合的に働く必要があると指摘し、共有経験と共有不全経験の2つの下位尺度からなる共感経験尺度改訂版(ESSR)を作成している⁷⁾。共有不全経験とは、他者の感情を感じとれなかった経験であり、自己と他者の間に個性の認識を生むと考えられるものである。共感経験尺度改訂版(ESSR)ではこれら2つの経験の2軸から共感性を次の4つに類型化している(図1)。

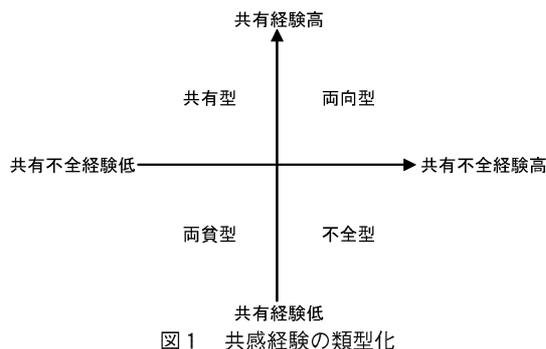


図1 共感経験の類型化

「両向型」：共有経験，共有不全経験ともに高く，他者を理解する最も高い共感性を持つ。

「共有型」：共有経験は高いが個性の認識は低く，共有体験を自己にひきつけてとらえる共感性を持つ。

「不全型」：共有不全経験が高く共有経験が低い。自己と他者の間に越えがたい障壁があり，その意味での孤独感もちやすい。

「両貧型」：両方の経験が少なく，対人関係そのものが弱く，共感性が最も低い。

本研究では、既報において作成した「電子メールに対する意識」尺度と角田の作成した共感経験尺度改訂版(ESSR)を用いた調査を実施し、両者の関連性について検討する。具体的には、共感経験尺度改訂版(ESSR)の結果に基づいて調査対象者を「両向型」,「共有型」,「不全型」,「両貧型」の各タイプに分け、電子メールに対する利点・欠点認識，マナー意識等の各尺度平均値を比較することとした。

2. 方法

2.1 調査対象

兵庫県内公立高校生728名(有効回答688名，有効回答率94.5%)を対象とした調査を実施し，ケータイメールを使用していると回答した生徒計658名を分析対象とした。

2.2 調査項目

(1) 電子メールの利用状況

前報と同じ使用頻度，使用年数，トラブル経験，重要性認識等5項目を用いた(図2①)

II. ケータイでのメールについて
ケータイメールに対する気持ちや経験について次の①～⑥に答えてください。

① あなたは普段、どのようにケータイメールを使っていますか？ 次の各項目に答えてください。(口)にチェックしてください

1. あなたはどのくらいの頻度でケータイメールを使っていますか？
 毎日頻繁に およぼ毎日数回程度 2～3日に数回程度
 週に数回程度 ほとんど使用していない 持っていない

2. あなたはいつ頃からケータイメールを使っていますか？ (持っていない)は以下の質問は答えてもよいです
 1年以内から 2～3年以内から 4～5年以内から 6年以上前から

3. あなたはケータイメールを使用して、トラブルに遭った経験はありますか？
 ともある 少しある あまりない まったくない

4. あなたにとってケータイメールの重要度はどのくらいですか？
 なくてはならない あった方がよいと思う なくてもよいと思う まったく必要ないと思う

5. あなたは主にどのような相手とケータイメールをやり取りしていますか？
 主に、実際に会うことの多い相手 主に、実際には会いにくい相手 両方

② ケータイのメールの良しと悪しについてあなたは次の項目に対してどの程度思いますか？

	そう思う	少し思う	あまり思う	全く思わない
1. メールは、友人や仲間と人間関係を深めたり維持したりするのに役立つこと	4	3	2	1
2. メールは、新しい人間関係を広げていくのに役立つこと	4	3	2	1
3. メールは、一度にたくさんの人と素早く情報を共有するのに役立つこと	4	3	2	1
4. 身近な友人だけでなく、遠くにいる人ともコミュニケーションが取れること	4	3	2	1
5. 仲の良い友人だけでなく、普段あまり話さない人ともコミュニケーションが取れること	4	3	2	1
6. メールの内容が残っているため、後で自由に読み返せること	4	3	2	1
7. 電話と違って自分の空いている時間に使用することができること	4	3	2	1
8. 直接言いにくいことでも、メールを使うと言いやすいこと	4	3	2	1
9. メールは些細なことや、あまり重要でないことでも気軽に聞きやすいこと	4	3	2	1

図2 質問項目(電子メールの利用状況及び利点認識)

(2) 「電子メールに対する意識」尺度

前報で作成した利点認識9項目，欠点認識8項目，マナー意識8項目，計27項目(4件法)を用いた(図2②, 図3③, 図3④)。

③ケータイのメールの悪いところについてあなたは次の項目に対してどの程度思いますか？

1. メールによる悪質な被害やトラブルがあること	4	3	2	1
2. 返信がすぐに来ないなど、断片的なコミュニケーションになること	4	3	2	1
3. メールでのやり取りに時間を費やすこと	4	3	2	1
4. 使用料が高いこと	4	3	2	1
5. メールのやり取りの中で、誤解やトラブルが起こること	4	3	2	1
6. 相手の表情や話し方がメールを通して分からないこと	4	3	2	1
7. メールを通して相手の気持ちを理解することが難しいこと	4	3	2	1
8. メールを通して相手に自分の気持ちを伝えることが難しいこと	4	3	2	1

④ケータイのメールの使用に際して、どの程度次の項目でマナーに配慮していますか？

1. 文章を相手の分かりやすいように作成している	4	3	2	1
2. 相手の立場、状況、時間帯に気をつけている	4	3	2	1
3. チェーンメール等の迷惑メールに対して適切な対処をしている	4	3	2	1
4. 相手に失礼にならないように、文章の言葉遣いに気をつけている	4	3	2	1
5. 絵文字や漢字等を使用して自分の気持ちを表現するようにしている	4	3	2	1
6. 送信する前に読み返すなど、相手に自分の言いたいことが伝わるか確認するようにしている	4	3	2	1
7. 重要な連絡はメールだけに頼らないようにしている	4	3	2	1
8. 質問に答えてもらったら必ずお礼をするなど、礼儀を守るようにしている	4	3	2	1
9. 返信は可能な状況なら必ずするようにしている	4	3	2	1
10. メールをむやみに送り返さないようにしている	4	3	2	1

⑤ケータイのメールについて日頃考えていることや、感じていることがあれば、自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。

図3 質問項目(電子メールの欠点認識及びマナー意識)

アンケート

このアンケートは、皆さんの人との関わり方やケータイのメールの使い方に関するものです。

学年 _____ 年生 性別 男・女

1. 人との関わりについて
人との関わりについて、あなたのこれまでの経験として、次の各項目にどの程度当てはまりますか？

1. 意んている相手の気持ちを感じとらうとして、自分もその人の意んを経験したことがある。	7	6	5	4	3	2	1
2. 何かに意んしている相手の気持ちを感じとらうとし、自分も同じ様な気持になつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
3. 何かに意んしている相手の気持ちを感じとらうとし、自分も同じ様な気持になつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
4. 不快な気分である相手からその内容を聞いて、その人の気持を感じとつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
5. 相手が何かを認めてくるときに、その人の体験している意んを感じとつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
6. 相手があることに驚いたとき、その人の驚きを自分も感じとつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
7. 相手が何かを期待しているときに、そのわくわくした気持を感じとつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
8. 相手が楽しい気分になっている場合に、その楽しさを感じとらうとし、その人の気持を味わつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
9. 相手が「こんなことがあって、とてもびっくりした」と話すのを聞いて、その人の気持を感じとらうとし、自分も驚いた気持になつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
10. 相手が喜んでくるときに、その人の気持を感じとらうとし、一緒にうれい気持になつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
11. 相手が何かに意んを立てていても、自分はその人の怒り感とこなかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
12. 意んしている相手といても、自分はその人のように意んしななかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
13. 相手が何かに意んしていても、自分はその意んを感じななかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
14. 不快な気分である相手からその内容を聞いても、自分は同じように不快にななかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
15. 相手が何かを認めてくても、自分はその意んを感じななかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
16. 相手があることに驚いたと認めても、どうしてそんなに驚くのかわからななかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
17. 相手が何かを期待していても、同じようにわくわくしななかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
18. 相手が楽しい気分といても、自分はその人のように楽しき感じななかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
19. 相手が「こんなことがあって、とてもびっくりした」と話すのを聞いても、自分は驚いた気持にななかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1
20. 相手が何かに喜んでくても、自分はいれい気持にななかつたことがある。	7	6	5	4	3	2	1

図4 質問項目(共感経験尺度)

(3) 共感経験尺度改訂版(ESSR)

角田(1994)の作成した共感経験尺度改訂版(ESSR)

として、共有経験尺度10項目、共有不全経験尺度10項目計20項目について7件法で回答させた(図4)。

2.3 分析の手続き

調査は、各調査対象校の担当教員に依頼して実施した。調査後、共感経験の類型化は、共有経験尺度、共有不全経験尺度の各項目への回答を合計して尺度得点を算出し、各尺度得点の中央値を基準に高得点群と低得点群に分け、図1に示す2つの尺度を組み合わせた4象限に基づいて分類した。

3. 結果と考察

3.1 分析対象者の状況

まず、分析対象者の共感経験の類型化を行った。その結果、「両向型」170名(25.8%)、「共有型」147名(22.3%)、「不全型」162名(24.6%)、「両貧型」179名(27.2%)に分けられた(表1)。共感経験と使用頻度、使用期間、トラブル経験、重要性認識、使用相手のクロス集計を行ったが、全てにおいて有意な差異は認められなかった。特に、前報では、トラブル経験や使用頻度が電子メールに対する利点・欠点認識、マナー意識と関連していることが示されているが、本研究の結果からは、共感経験とトラブル経験との間に直接的な関係性は認められなかった。

表1 共感経験別分析対象者の状況

		両向型	共有型	不全型	両貧型	計
1年	頻度	76	66	73	75	290
	割合	26.2%	22.8%	25.2%	25.9%	100.0%
2年	頻度	50	44	57	83	234
	割合	21.4%	18.8%	24.4%	35.5%	100.0%
3年	頻度	44	38	32	20	134
	割合	32.8%	28.4%	23.9%	14.9%	100.0%
男子	頻度	65	41	98	80	284
	割合	22.9%	14.4%	34.5%	28.2%	100.0%
女子	頻度	105	107	64	98	374
	割合	28.1%	28.6%	17.1%	26.2%	100.0%
全体	頻度	170	147	162	179	658
	割合	25.8%	22.3%	24.6%	27.2%	100.0%

3.2 電子メールに対する意識と共感経験の関連性

共感経験のタイプ別に電子メールに対する利点・欠点認識、マナー意識の平均値を求め、それぞれ一元配置分散分析を行った(表2、表3、表4)。その結果、全体では、利点・欠点認識、マナー意識において共感経験の主効果は有意であった(表5)。多重比較の結果、利点認識では、「両向型」と「共有型」の水準が「不全型」と「両貧型」に比べ有意に高くなった($F(3,654)=6.55, p<.01$)。欠点認識では、「両向型」の水準が「不全型」と「両貧型」に比べ有意に高くなり、「共有型」の水準が「不全型」と比べ有意に高くなった($F(3,654)=4.34, p<.01$)。また、マナー意識では、利点認識と同様に、「両向型」と「共有型」の水準が「不全型」と「両貧型」に比べ有意に高くなった($F(3,654)=17.46, p<.01$)。

表2 電子メールに対する利点認識の平均値(全体)

	n	M	S.D.
両向型	170	3.42	0.47
共有型	148	3.41	0.43
不全型	162	3.23	0.50
両貧型	178	3.26	0.51
全体	658	3.33	0.81

表3 電子メールに対する欠点認識の平均値(全体)

	n	M	S.D.
両向型	170	3.13	0.55
共有型	148	3.10	0.53
不全型	162	2.93	0.60
両貧型	178	2.99	0.58
全体	658	3.04	0.94

表4 電子メール使用時のマナー意識の平均値(全体)

	n	M	S.D.
両向型	170	3.50	0.40
共有型	148	3.54	0.35
不全型	162	3.24	0.48
両貧型	178	3.29	0.52
全体	658	3.39	0.78

次に、男子において、共感経験のタイプ間で電子メールに対する利点・欠点認識、マナー意識の平均値を比較した。一元配置分散分析の結果、マナー意識においてのみ共感経験の主効果が有意であった。多重比較の結果、「両向型」と「共有型」の水準が「両貧型」と「不全型」に比べ有意に高くなった ($F(3,280)=7.37, p<.01$, 表6)。

女子においても同様に一元配置分散分析を行った。その結果、利点認識とマナー意識において共感経験の主効果が有意であった。多重比較の結果、利点認識では、「両向型」の水準が「不全型」と「両貧型」に比べ有意に高くなり、「共有型」の水準が「不全型」と比べ有意に高くなった ($F(3,370)=4.34, p<.01$)。マナー意識では、「共有型」の水準が「不全型」と「両貧型」に比べ

有意に高くなり、「両向型」の水準が「不全型」と比べ有意に高くなった ($F(3,654)=4.34, p<.01$, 表7)。

3.3 考察

これらの結果から、全体では、他者と感情を共有した経験を持つ「両向型」や「共有型」の生徒の方が、共有経験を持たない「不全型」や「両貧型」の生徒に比べて、電子メールの利点や欠点の認識、マナーに配慮する意識が高い傾向にあることが示唆された。すなわち、生徒が電子メールのメディアとしての特徴を踏まえ、適切な使用方法に配慮できるようになるためには、その前提として対人コミュニケーションにおける他者との感情共有の経験が必要になると考えることができる。これは、他者との感情共有の経験のある生徒ほど、メディアコミュニケーションにおいてメディアの向こう側にいる他者の立場をよりよく推察することができると共に、メディア使用の目的がコミュニケーションであるという大前提から逸脱しにくいのではないかと考えられる。また、この関連性には性別間の差異が認められ、男子はマナー意識に対してのみ、女子では利点認識とマナー意識に対して共感経験の影響が示された。特に、女子において電子メールの利点認識に影響が認められたことは、少なくとも女子では他者との感情共有を基礎としたメディアコミュニケーションの経験が、メディアそのものの特徴の理解へと結びつきやすいことを意味している。

しかし、これらの傾向は、言い換えれば、コミュニケーションによる感情共有の経験を持たない生徒に、電子メールのメディアとしての特徴の理解やマナー意識の形成を促すことは、感情共有の経験を持つ生徒ほど容易ではないことを意味している。前述した通り、共感経験は、電子メール使用時のトラブル経験には直接、関連していな

表5 電子メールに対する意識各尺度の平均値に対する分散分析(全体)

	F	値	判定	多重比較
利点認識	$F(3,654)=6.55$	**	両向型(3.42)=共有型(3.41)>両貧型(3.26)=不全型(3.23)**	
欠点認識	$F(3,654)=4.34$	**	両向型(3.13)>両貧型(2.99)=不全型(2.93)**、共有型(3.10)>不全型(2.93)*	
マナー意識	$F(3,654)=17.46$	**	共有型(3.54)=両向型(3.50)>両貧型(3.29)=不全型(3.24)**	

N=658 ** $p<.01$

表6 電子メールに対する意識各尺度の平均値に対する分散分析(男子)

	F	値	判定	多重比較
利点認識	$F(3,280)=2.00$			
欠点認識	$F(3,280)=1.12$			
マナー意識	$F(3,280)=7.37$	**	両向型(3.42)=共有型(3.40)>不全型(3.18)=両貧型(3.10)**	

n=284 ** $p<.01$

表7 電子メールに対する意識各尺度の平均値に対する分散分析(女子)

	F	値	判定	多重比較
利点認識	$F(3,370)=3.86$	**	両向型(3.48)>両貧型(3.32)=不全型(3.25)**、共有型(3.41)>不全型(3.25)*	
欠点認識	$F(3,370)=1.63$			
マナー意識	$F(3,370)=6.59$	**	共有型(3.59)>両貧型(3.44)=不全型(3.33)**、両向型(3.54)>不全型(3.33)**	

n=374 ** $p<.01$ * $p<.05$

いため、「不全型」や「両貧型」の生徒が直ちに電子メールの使用方法が不適切とはいえないものの、高校情報科における情報モラルの指導場面では、少なくとも生徒の共感経験の実態を教師が適切に把握し、その実態に応じた指導方法に留意する必要があると考えられる。

4. まとめと今後の課題

以上、本研究では、電子メールに対する意識の形成に果たす対人コミュニケーション時の共感経験の影響について検討した。その結果、本調査の範囲内で以下の知見が得られた。

- (1) コミュニケーション時の共感経験は、電子メールに対する重要性認識やトラブル経験の有無等に直接、関連していなかった。
- (2) しかし、電子メールに対する意識では、感情共有の経験を持つ「両向型」や「共有型」の生徒の方が、共有経験を持たない「不全型」や「両貧型」の生徒に比べて、電子メールの利点や欠点の認識、マナーに配慮する意識が高い傾向にあることが示唆された。
- (3) この関連性には性別間の差異が認められ、男子はマナー意識に対してのみ、女子では利点認識とマナー意識に対して共感経験の影響が示された。このことから女子では、他者との感情共有を基礎としたメディアコミュニケーションの経験が、メディアそのものの特徴の理解へと結びつきやすいことが示唆された。

これらの結果から、高校情報科の授業では、他者との感情共有経験を基盤に、電子メールのメディアとしての特性を認識させ、必要なマナーについて考えさせる学習活動の重要性が指摘できる。これは、感情共有の経験を基盤とすることで、対面コミュニケーションとメディアを用いたコミュニケーションの「感情の理解・伝達の違い」に気づき、必要なマナーについて主体的に考えさせることができるのではないかと考えられるためである。しかし、日常生活において感情共有の経験の少ない生徒は、このようなメディアの違いによる「感情の理解・伝達の違い」に気づきにくいいため、メディアの特性を実感しづらい可能性がある。したがって、こうした生徒に対しては、メディアの特性に対する気づきを促すために、擬似的であっても少なからず感情共有を経験しうる体験型のコミュニケーション学習など、多様な手立ての工夫が必要ではないかと考えられる。

今後は、本研究で得られた知見に対する追試と共に、電子メールを用いたコミュニケーション経験の蓄積が、個々の生徒の長期的な意識の変容に及ぼす影響を縦断的に検討する必要があるだろう。その上で、具体的な教材や学習指導法の開発研究を実践的に展開することが重要であると考えられる。これらについてはいずれも今後の課題とする。

文献

- 1) 大貫和則・鈴木佳苗 (2007) 高校生のケータイメール利用時に重視される社会的スキル, 日本教育工学会論文誌31 (Suppl.), pp.189-192
- 2) 木内泰・鈴木佳苗・大貫和則 (2008) ケータイを用いたコミュニケーションが対人関係の親密性に及ぼす影響—高校生に対する調査—, 日本教育工学会論文誌32 (Suppl.), pp.51-58
- 3) 宮川洋一・森山潤 (2011) 道徳的規範意識と情報モラルに対する意識との関係—中学校学習指導要領の解説「総則編」に示された情報モラルの考え方に基いて—, 日本教育工学会論文誌35(1), pp.73-82
- 4) 森山潤・川上達大・上之園哲也・中原久志 (2011) テキストマイニングを用いた高校生の電子メールに対する意識の分析, 兵庫教育大学研究紀要, 38, pp.127-135
- 5) 森山潤・川上達大・中原久志・上之園哲也・萩嶺直孝 (2011) 高校生の電子メールに対する利点・欠点認識がマナー意識の形成に及ぼす影響, 兵庫教育大学学校教育センター学校教育学研究, 24, 印刷中
- 6) 角田豊 (1991), 共感経験尺度の作成, 京都大学教育学部紀要, 37, pp.248-258
- 7) 角田豊 (1994), 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類似化の試み, 教育心理学研究, 42, pp.193-200